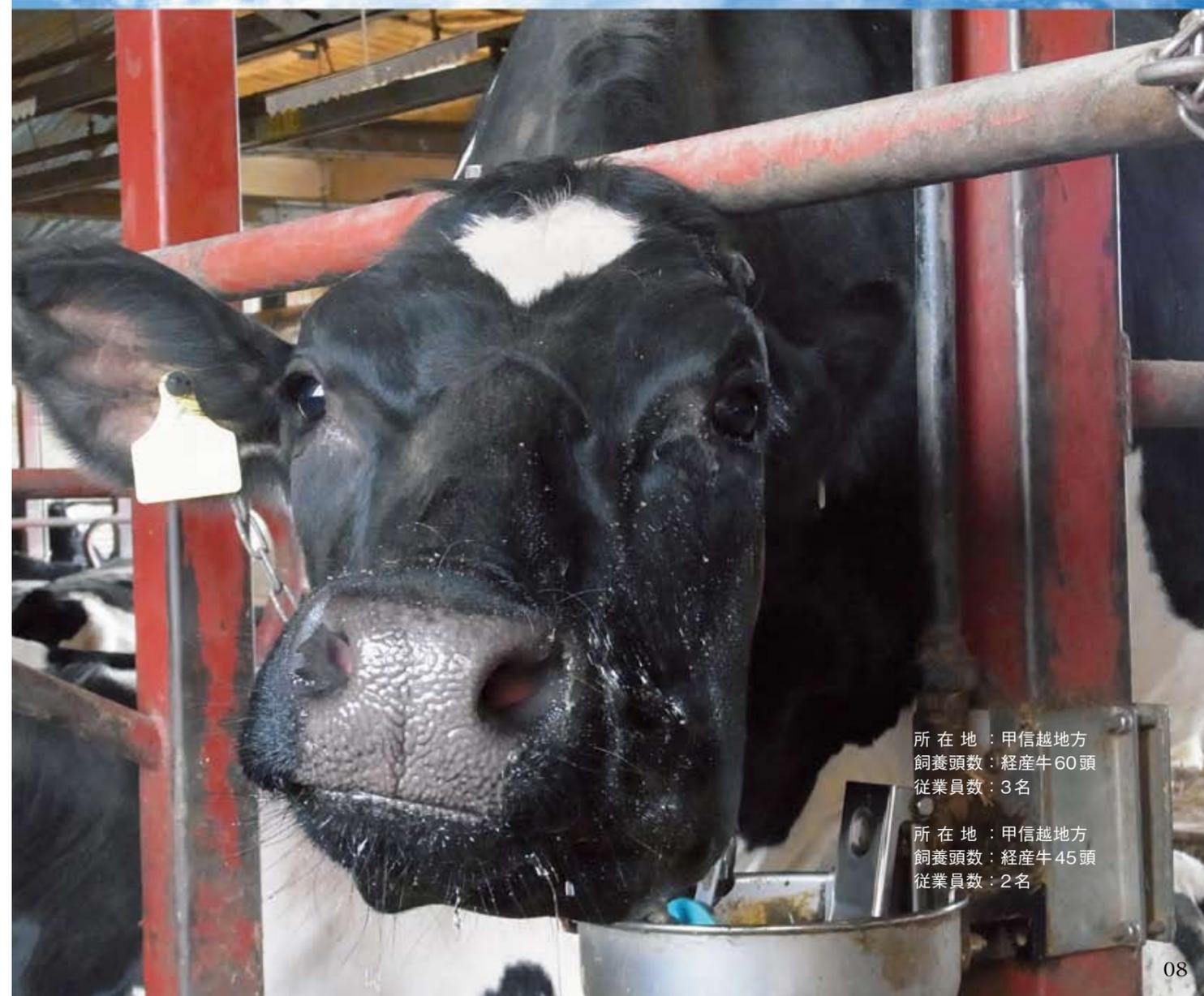


早めの暑熱対策で、生産性低下に歯止めを!

過酷な暑熱の時期が迫ってきた。暑熱ストレスは酪農経営にとって毎年の課題である。暑熱により乳牛は生産性を損ね、酪農経営に大きな損失を及ぼす。今回は研究所の最新の知見を活用した飼料により、暑熱対策に取り組んでいる管内の事例を紹介する。



所在地：甲信越地方
飼養頭数：経産牛60頭
従業員数：3名

所在地：甲信越地方
飼養頭数：経産牛45頭
従業員数：2名

夏場対策飼料の活用

乳牛は暑熱ストレスを受けると採食量が減少し、栄養のバランスや第一胃内の発酵の変化により乳量や乳脂肪の低下が起きる。特に、一定の乳脂肪率を下回るとペナルティにより、農家の手取りは少なくなり収益に大きく影響を及ぼす。

例年、甲信越地方の暑さのピークは7月。比較的冷涼な地域のため、それほど気温が上昇しなくても、急激な気温変化に乳牛は敏感に反応する。昨年は5月頃から乳脂肪率が低下し始めた。これらに対応するため、NOSA Iの獣医師や農協技術員、くみあい飼料担当者が一丸となり、夏場対策飼料の提案を開始した。

取材した最初の農場では、昨年6月から夏場対策飼料を使い始めた。例年、8月頃は乳脂肪率が3.5〜3.6%となるが、昨年は3.7%以上で推移した(図1)。実際に「摂取量が落ちなかった」ことが乳脂肪率の改善につながったのだろうと話す。更に当該農場では、昨年1年間を振り返り、廃用頭数が少なかったことも、夏場対策飼料の効果であると感じている。

次に取材した農場では、昨年7月より夏場対策飼料の給与を開始した。当該農場では以前より重曹入り鉢塩の設置や重曹ペレットを給与し、特に夏場に備えていたが、効果はあまり感じていなかった。しかし、夏場対策飼料の給与を始めたところ、重曹入り鉢塩の減りが遅くなるのを感じ、実際に乳脂肪率も例年より高く推移した(図2)。

環境面の対策も不可欠

管内では飼料面のみならず、環境面での夏場対策の意識も高い。両農場に共通しているのが、送風と水槽の工夫である。

送風に関して最初の農場では、トンネル換気を採用しており、牛舎の断面を遮る壁を設置している(写真1、2)。これにより牛舎内を抜ける風が、効率的に牛体にあたるようになる。次の農場も同様にトンネル換気だが、排気先への粉塵を考慮し、牛舎側面に換気扇を取り付けける変則型を採用。また、入気口には板を設置し、牛体に向かって風が流れるよう工夫されていた(写真3)。

水槽においては、乳牛は搾乳量に応じて異なるが1日に100リットル以上飲水するため、両農場ともウォーターカップを採用していたが、非常に衛生的に管理されていた(写真4)。最初の農場では6年前に、よりサイズの大きな現在のウォーターカップに取り替え、次の農場ではより水量が多くなるようにより太い水道管へと交換した。「特に夏場は、水は十分に飲めるようにすること」が大切である。

昨年の取り組みを参考にしながら、管内では今年の冬から酪農部会勉強会などを開催し、暑くなる前から暑熱対策の意識付けを開始している。3月には農協より管内全戸への暑熱対策飼料の案内も開始し、今年も万全の体制で夏に臨む。

●暑熱対策に関する情報やお問い合わせは、お近くのくみあい飼料まで



写真1,2. トンネル換気の採用で、牛舎の断面を遮る壁を設置している



写真3. 入気口が狭い牛舎では、板を配置し牛体に風が流れるように工夫されている



写真4. 両農場とも水槽にはウォーターカップを採用している